

# 林業樹種雑感

## その4 ベイマツ

林野庁研究指導課 嶋瀬拓也



### ■はじめに

第4回は、前回予告のとおり、ベイマツである。

北洋材やラジアタパインのことをあれこれ調べていくうちに、「原木調達条件の優劣は、製材工場の立地点決定や産地間競争の帰趨に、ことのほか大きな影響を及ぼしているかもしれない」との感触を得て、やがてそれは確信に変わっていった。このあたりのいきさつは、「その2」「その3」で詳しく述べたとおりである。ところが、その理屈ではどうしてもつじつまが合わないケースがあった。瀬戸内地方一帯、特に呉港（広島県呉市）のベイマツ平角産地である。

周知のとおり、米材とは、米国・カナダ産の木材をいう。一般的な航路からすると、我が国へは、真東より北寄りの方角から入ってくることになる。このため、純粋に原木調達の便だけを考えれば、おそらく道東の太平洋側がもっとも有利な立地点である。消費地へのアクセスなど、他の条件を加味すれば、関東地方の東岸部になるだろう。いずれにせよ、それほど西に最適解はないはずだった。それにもかかわらず、呉のベイマツ平角製材は、国内でのシェアを年々高め、一人気を吐いていた。

この“不都合な真実”には、ずいぶん悩まされた。しかし、この呉産地こそが、後に自身の得た感触が正しかったことを証明する手がかりとなった。

今回のテーマはしたがって、国内製材産地の立地変動に関する3部作（その2～その4）のまとめであるとともに、“世の中は常に未完成である”ということに気づくまでの私の道りを示したのものである。

### ■ベイマツとは

ベイマツといえば、まず触れておきたいのが、その名前である。よく知られた話であり、本題ともほぼ無関係なので、ご無用の方は飛ばしていただきたい。

「ベイマツ」という呼び名は、いうまでもなく「米国产のマツ」の意味であろう。地マツと用途が重なったことが由来だろうか。明治期にはすでに輸入されて

いたが、その当時から「メリケンマツ」と呼ばれていたそうなので、「マツ」と呼ばれるようになってからゆうに100年を超える歴史がある。しかし、マツ科ではあるが、マツ属ではない。北海道では、エゾマツ（トウヒ属）やトドマツ（モミ属）のことも一緒くたにして「マツ」と呼ぶので、さほどの違和感はないかもしれないが、内地出身の私にとっては、マツといえどやはりアカマツ・クロマツであり、エゾマツやトドマツをそう呼ぶことには、いまでも少し抵抗がある。

現地では、「ダグラスファー（Douglas Fir）」と呼ばれる。「fir」とはモミのことである。しかし、分類学上は、モミ属でもない。トガサワラ属である。トガサワラ属は、学名では「Pseudotsuga」（“シュードツガ”と発音する）という。前半の「pseudo-」は「偽の」という意味の接頭辞、後半の「tsuga」は「ツガ（栂）」のことなので、「偽物のツガ」という意味になる。

長々と述べてきたが、何者であるのか、名前からはまったく分からないのが、このベイマツである。

用途についても少しみておきたい。まず、目細の大径材は「ピーラー」と呼ばれ、造作などに用いられてきた。古くは旧・丸ビル（1923年竣工）の基礎杭にも使われている。1999年の取り壊しの際には、まだ十分使える状態だったという。

一般材や原料材の分野でも、活躍の場は多い。まず、製材用材としては、平角や小割材など、材質を選ぶ用途にも対応可能な万能選手である。いまでは集成材がずいぶん幅を利かせるようになったが、かつては、「柱はスギかベイツガ、梁・桁はベイマツ、土台はベイツガ注入」というのが定番だった。合板用材としては、ロシアの丸太輸出税引き上げの際に、北洋カラマツ（ラーチ）代替樹種の1つとして輸入が急増した。さらに、製紙用木材チップとしても、包装用紙などに求められる強度の高いパルプが得られるため、主要品種の一角を占める。ほかにも、例えば米国オレゴン州では、パルプグレードのベイマツ丸太からディメンションランバーを生産する製材工場や、ベイマツの

おが粉からティッシュペーパーを生産する製紙工場を目にしたことがある。このように、使い勝手がよく、資源量も供給量も豊富なため、各方面に幅広く用いられている。

### ■「ベイマツ平角製材」というビジネスモデル

米材は、我が国でよく知られている樹種だけでも、ベイマツのほか、ベイツガ・スプルス・ベイスギ・ベイヒバなど、多様である。しかし、こと丸太輸入に関しては、ベイマツへの一極集中が進みつつある。ベイマツも、輸入量は減り気味だが、外材全体を見渡しても、単一の樹種で100万立米の大台を保っているのは、もはやこのベイマツだけである（写真1～3）。

外材丸太の輸入量が見る影もないほど縮小した背景には、「海外から輸入した丸太を国内で製品に加工し、国内市場に供給する」というやり方が、特に一般材の分野では、すでに難しいものになっているという事情がある。ではなぜ、ベイマツ丸太だけが、なお数百万立米の水準を保ち続けているのか。それは、「ベイマツ平角製材」というビジネスモデルが、それだけ強固なものだったからにほかならない。

このモデルを生み出したのは、中国木材(株)（広島県呉市＝本社）である。同社は、酒樽製造業を前歴とするが、その後、時代の変化にあわせて木材チップ製造業へと転身（1953年）し、さらに北洋材製材（1967年）を経て、ベイマツ製材に行き着いたのが1977年のことである（同社ホームページより）。

早くから外材製材が発達していた瀬戸内地方にあっ

て、中国木材は完全に後発だった。だからこそ、当時まだ先行きがはっきりしていなかった北洋材製材に可能性を求めたのだろう。しかし、北洋材丸太の供給は期待されたほど伸びず、米材へと向かうこととなった（当時、輸入が拡大しつつあったニュージーランド材に向かわなかった理由は分からない）。米材に向かうと決めたものの、すでに原木調達・製品販売とも、先発組があらかた押さえていた。このため同社では、当時まだあまり注目されておらず、十分な供給量と低価格が見込めた、細めのベイマツ丸太に目をつけた。そして、その材質などから、主に木造住宅の梁や桁となる平角を作るのがベストと判断し、これを主力品目とした。以上が、同社の社史にみるベイマツ平角製材誕生の経緯である。

その後のベイマツ平角製材および中国木材の発展ぶ



写真2 積み込みを待つベイマツ丸太



写真1 港に丸太を運び込むトレーラーの列  
（2006年、ワシントン州ロングビュー港＝以下同じ）



写真3 停泊中の丸太輸送船



写真4 試運転中の中国木材鹿島工場（2007年）

りは、周知のとおりである。特に瀬戸内一帯には、ベイマツ平角を主力とする製材工場がいくつも生まれた。『木材需給報告書』によれば、米材製材に占める広島県のシェアは高まり続け、2007年には48%（素材入荷量ベース）に達した。中国木材自身も、加工能力の増強だけでなく、より大型の丸太輸送船を次々に就航させ、全国各地に物流拠点を設けるなど、輸送体制の整備にも精力的に取り組み、国内市場で圧倒的なシェアと競争力を持つに至った。

#### ■呉であった理由

ところが、同年をピークに、広島県のシェアは低下していく。代わって急上昇したのが茨城県である。この年、鹿島港（茨城県神栖市）に建設された中国木材の新工場が操業を開始したことがその理由である（写真4）。当時の発表によれば、この工場は、年間原木消費能力180万立米という途方もない規模を持ち、すでに国内製材業界で他社を圧倒していた会社にとっても、新たな旗艦工場という位置づけに違いなかった。

この進出計画を耳にしたとき、思い出したことがあった。それよりさらに何年も前、まだ外材製材にまったく関心がなかった頃に、先輩研究者から聞いた話である。「中国木材という国内最大の製材業者が、かつて茨城に進出しようとしたが、地元業界の大反対にあって断念した」という内容だった。

鹿島工場建設のニュースとこの記憶が結びついたことによって、国内最大のベイマツ産地が呉にあり、な

お拡大を続けていることにより合点がいった。中国木材の本社が呉にあるのは、その来歴に由来するものだろう。しかし、時代が変わって、ベイマツ製材事業がしだいに大きくなり、商圏も広域化する一方、国内外の同業者との市場競争は激化し、呉（だけ）を拠点にこの事業を続けていくことは、必ずしも合理的な選択ではなくなっていった。だから同社は、茨城への進出を試みたのだろう。そして、反対運動のため一度は断念したものの、何年も後になって実現した。この間、同社は、ベイマツ平角製材と、その発展としての集成材事業を、呉やその周辺で磨き続けていた。

つまり、私の頭を悩ませていた、「なぜベイマツ平角製材の最大の産業集積は呉にあるのか」という問いへの答えは、「業界最大手が、最適立地点の獲得にまだ成功しておらず、もとの土地でがんばっていたため」だったのである。

#### ■おわりに

企業が長期にわたって存続し、発展していくためには、原料・製品両市場をはじめとするさまざまな環境の変化に、常に対応していかななくてはならない。しかし、そのための原資—資金だけでなく、事業用地・生産施設・人材・技術・知識・取引関係・ブランドなど幅広い意味での一は、過去からの蓄積としてある。つまり、現有資産と、向かうべき方向の間には、常にギャップが存在するのが普通である。

かつて有利だった土地が、さまざまな変化を受けて有利ではなくなる。そのとき企業は、自身の存続と発展をかけて、慣れ親しんだ土地を離れることさえいとわれない。ただしそれは、いつでも、誰にでもできるわけではない。すなわち、理想的な立地点を見出し、そこへ向かおうとする意思があったとしても、思い立ったとき、ただちに思い描いたとおりのことができるとは限らないということである。

私が悩ましく感じていたのは、ある時点におけるベイマツ平角製材の立地状況をうまく説明することができなかったからである。しかし、静止画ではなく動画として、タイムラグを織り込んで眺めればよかったのだ。ひどく単純なことだが、そのことに思い至ってから、ずいぶん見晴らしがよくなったような気がしている。